

# ミシシッピデルタにおける 公民権運動の展開と帰結（下）

——「フリーダムサマー」20周年によせて——

藤 岡 惇

## 目 次

- I はじめに——1960年代のデルタ
- II サンフラワー郡における運動の展開（以上前号）
- III たち上るプランテーション労働者と土地清掃
- IV 黒人の自主的組織の前進——ホームズ郡のばあい
- V 小 括（以上本号）

### III たち上るプランテーション労働者と土地清掃

1930年代のあの黒人クロッパーや小作農たちの運動は、公民権獲得という要求からではなくより即自的な生活要求から始まった。追いたて反対・賃上げから土地獲得＝農民的自立に至る多様な経済要求が運動の出発点だったわけである。1960年代のばあいも同様に——とくにデルタの政治的力関係の下では、公民権要求だけでプランテーション内に囲いこまれた農業労働者を組織することは極めて困難であった。彼らに接近するためには、賃上げや労働条件改善など経済要求を糸口にする以外にないというのが、当時の公民権活動家の一致した見解であった。<sup>1)</sup>

#### （1）MFLUの結成とストライキ（65年春）

30年代以来絶えて久しいプランテーション労働者の労働組合が、ついにSNCC系活動家の手引で65年1月誕生した。Mississippi Freedom Labor Union

(MFLU) と名のつたこの組合は、当時の最賃制の水準たる時給1.25ドルへの賃上げや8時間労働・失業手当・児童労働の強制反対などの要求<sup>2)</sup>をかかげて、早速このデルタの地で前代未聞のスト闘争を始めることになった。<sup>3)</sup>

まず4月に Bolivar 郡 Shaw で約200人の労働者がストに突入したのを皮きりに、ストの波はデルタ西部一帯に広がり、春季のスト参加者は、1,000人以上の規模に達したといわれる。<sup>4)</sup> またテネシー州に飛火するなど各地に少なからぬ波紋も及ぼした。<sup>5)</sup> しかし結局、このストライキは大きな成果をあげることなく消滅せしめられる。そして同年秋には再度のストを構えることができぬまま、<sup>6)</sup> MFLU組織は衰えていくことになる。

それではなぜ、MFLUはスト闘争に勝利しえなかったのだろうか。その理由の第一は、機械化によってすでに過剰と化していた町に住む日雇いの単純労働者層——10時間以上働いても日給2.5～3ドルというこの最も弱い立場におかれた労働者たちが、スト参加者の圧倒的部分（Shaw では90%）を占めていたことである。<sup>7)</sup> 彼らのばあい「春になっても賃金が要求額に達するまでは働きにでかけず、その間魚釣りや家庭菜園の耕作で食いつなぐ」という消極的戦術がストライキの実相となる他なかつた。<sup>8)</sup>

第二にしたがって、プランテーション内の基幹的労働者層への波及が、決定的に弱かったことである。実際プランターに脅威を与えうる能力をもつ労働者——たとえば日給5～8ドルを得ていた「労働貴族」たるトラクター運転手や町で日雇いを徴募しトラックで運びこむ hauler と呼ばれた請負業者の中で、MFLUに呼応してストに突入した者は、ごく少数にすぎなかつた。<sup>9)</sup>

最後に、公民権運動組織のSNCCやDMこそ支援したものの、全国的な有力組合は総じてこのスト闘争を黙殺したことの否定的影響も指摘しておかなければならない。

ただし基幹的労働者がたち上り、プランテーションを内部からゆり動かした事例は皆無ではなかつた。以下に述べるワシントン郡 Tribett 地区で展開された闘争は、その最も雄弁な事例だといってよい。

## (2) 「ストライキ・シティ」の抵抗

これより先、デルタ黒人の貧困救済と布教をめざして Delta Ministrey of the National Council of Churches (DM) という組織が、北部のリベラルな教会組織の後おしで結成されていた (64年9月活動開始)。このユニークな組織は、デルタで最もリベラルな都市 Greenville を拠点として黒人の組織化に努め、SNCC 撤収後は同州で最大の有給スタッフ (65年秋22人, 67年末34人) を擁する公民権運動の有力な担い手に成長していた。<sup>10)</sup>

このDMの支援の下で Greenville 郊外 Tribett 地区のプランテーション労働者の間で、組織づくりの動きが始まったのが64年末であった。この地域でも黒人教会や労働者住宅は全てプランターの所有・監視下にあったため、まず安全な集会場を確保すること自体が至難事であった。しかし結局この地域で唯一80エイカの土地を所有していた黒人の一雑貨商 (Leland の東2マイルに住む Roosevelt Adams) が、自からの家を会場に提供した。そして64~65年の冬の間中、数十名を集めた集会が繰り返された。

その結果65年春、当時 MFLU の本部のあった Shaw とも連絡をとって、ついに Tribett 地区の3大プランターを相手に時給1.25ドルへの賃上げを要求するストに突入する決議をおこなった。この集会には、3大プランターの下で働くトラクター運転手など基幹労働者の大多数を含む約60人が参加したとい<sup>11)</sup>う。

しかしふたをあけてみると当日実際にストに入ったのは、Andrews Plantation に働く基幹労働者11家族だけであった (ここでは不参加は1家族のみ)。それ以外の労働者はすべて、事前に察知したプランター側のアメ (時給0.5ドルへの賃上げ) とムチ (解雇) の攻撃をうけてきり崩されていたのである。

プランターの Andrews は、ただちに警察力を導入してスト参加者48人 (家族も含め) を公道に放逐した。<sup>12)</sup> また全白人社会は、彼らに一切の住居や職を与えぬ「神聖同盟」を結ぶことで呼応した。

これに対して Isacc Foster をリーダーに John H. Sylvester, Wallace Greene, Garther Lee Martin などのストライカーたちは、DMの支援をうけて、<sup>13)</sup>

先述の集会場の提供者 Adams の所有地の一角にテントを張り、野営生活に入った。そして彼らは連日 Andrews Plantation 前にピケを張り、労働者をバスで運びこむ黒人請負業者 hauler に対する説得・威嚇をくりかえし、次第に黒人を雇うことが困難な事態をつくりだすことに成功した。

しかしプランター側は結局、アーカンソー州などから貧困白人 poor white を導入し、5・6月の除草期の労働力危機をのりきることになる。<sup>14)</sup>

他方「MF L U ローカル4」を名のるストライカーたちは、同年8月末にこの地の一部5エイカを購入し、そこに軍用テント8つを張り、Strike City となづけて定住する態勢をとった。同年12月にはこの地に支援学生の手でコミュニティセンターが建設され、翌年秋には、北部からの募金を得て2階だての建物が建設されることになった。<sup>15)</sup>

その後3家族はたち去ったが、今日も Strike City はこの地に残っている。もっとも土地は、J. Sylvester の所有・耕作する6エイカだけであるが。<sup>16)</sup>この地に今も定住する7家族は、主に賃労働と福祉受給とで生計をたてている。貧しい生活とはいえ彼らは自からのスト闘争を誇りとし、意気高く暮らしている。<sup>17)</sup>

### （3）プランテーション労働者の彷徨

——「フリーダム・シティ」づくりの闘い——

#### ① 65～66年のデルタ——追いたての頂点

デルタ農業の仕事口の激減は、60年代に入るとさらに拍車がかかることになった。ある推定によると、デルタだけで（デルタ14郡の1960年の総人口45.5万人）、60～66年の間に約4万人分の農業労働者が不要となった。この動きは66～68年の間に一層加速されて、新たに2.4万人分の仕事が消滅したという。<sup>18)</sup>

とくに65年秋から66年春の時期が、プランテーションからの黒人追いたての一つの頂点をなした。実際すでに66年1月の時点で、「昨年8月から後、デルタの6郡だけで2,200人もの住民がプランテーション内の小屋から追いたてられた」と述べるレポートが現われている。<sup>19)</sup>そして州全体のレベルでは66年春

には、トラクター運転手だけで6,500人が失職すると推定される有様であった。<sup>20)</sup>

この大量失業・追いたての背景には次の三つの事情があった。その第一は、農業の機械化—機械による手労働の駆逐が、ひきつづき急速に進んだことである。たとえばかつて最大の手労働量を要した棉花の摘み取り作業のばあい、機械による摘み取り率（面積比）は州平均でも1960年の42%から68年には85%にまで倍増した（デルタだけをとると66年時点ですでに90%）。<sup>21)</sup> 棉畑の雑草駆除の手労働 chopping 作業のばあい、<sup>22)</sup> 変化はさらに急速であった。すなわち除草剤の飛行機散布の普及のおかげで、州当局の推定によると、必要労働力は59年の6万人から66年にはわずか2000人に激減したのである。<sup>23)</sup>

第二に棉作の減反政策の影響である。棉花の過剰生産に直面した連邦政府は、66年度に作付面積の25—35%にも及ぶ大規模な減反を実施しようとしていた。<sup>24)</sup>

第三の理由として、公民権を求めて予想外に執拗にたち上る黒人民衆をデルタから危介払いしたいという白人支配層の思惑を指摘しなければならない。それまでは元クロッパーの黒人労働者をたとえ不要となっても「温情的」に元の小屋に住ませ、プランテーション内に囲いこんでおく方が、公民権運動の浸透を防ぎ、白人寡頭制権力を維持する上で好都合だという面があった。ところが65年投票権法の成立によって、プランテーション内の黒人にも投票所への道が大きく開かれることとなった。そのため今やデルタの黒人人口自体の激減こそ、白人権力を死守する最後の手段と一層強く観念され、この面からも追いたてに拍車がかかったことは想像に難くない。<sup>25)</sup>

加うるにデルタ農業に最低賃金制の適用を求める動き（67年から実施）も、逆に機械化による追いたてを促進する材料となったことを指摘しておかねばならない。

かつてデルタの深い原始林を伐採し、溝を堀り、沼を干拓し、堤防を築き、この地を一面の豊かな棉畑に変え、富のほとんどもを創造してきたのは、無数の黒人民衆の腕と汗とに他ならなかった。鉄鎖と借金の鎖とでこの地にひきとめられてきたこの最大の功労者を逆にデルタから追放＝危介払いする運動は、65～66年に、上の事情が重なりあって津波のようなもり盛りを示したのである。<sup>26)</sup>

## ② Greenville 空軍基地占拠の闘い

65年末から66年初は、雪の降りつづく厳寒の冬となった。食糧と住宅を求める黒人失業者の怨嗟のうめきが、デルタをおおった。1月27日には黒人の凍死事件が2件発生した。救済を求めて公民権組織は、州の福祉当局や連邦政府と必死の交渉をくりかえしたが、めだった成果はあがらなかった。

この事態に直面して Delta Ministrey, MFDP, MFLU の3者は急きょ Poor Peoples' Conference を結成して応急対策を協議した。そしてその結果、家なき者を結集して、国家権力の象徴たる連邦空軍の Greenville 基地（遊休中）内の建物に侵入し、住みつくとの方針を立案し、1月31日早朝これを実行するに至った。<sup>27)</sup> 地主的土地清掃によって追いたてられた黒人民衆とベトナム戦争遂行中の連邦軍とが、直接むかいあい対決する事態となったのである。

先述の Strike City 運動の中心人物だった Issac Foster が、この占拠闘争の指揮をとった。参加者は当初の50人（うち黒人は40人）から膨れあがり、2月1日には約100人が基地内の兵舎にたてこもるに至った。

しかし基地占拠は1日半しか続かなかった。はやくも同日昼には急派された連邦軍の実力行使をうけて基地外に排除されたからである。<sup>28)</sup>

## ③ 彷徨の旅——土地を求めて

再び路頭に投げだされた彼らに救いの手をさしのべたのが、Strike City の住民たちであった。その5エイカの土地の一部を開放して彼らを収容しようとしたのである。

このニュースを聞いて周辺のプランテーションからも家を失った黒人たちがこの地に殺到した。こうして2日目には約250人が狭いテントにひしめきあうという無政府的混乱を現出する。<sup>29)</sup> そのため結局、5日目にはこの地をたち去らざるをえない事態となる。

次に彼らを収容したのが、いわゆる Mud City（泥の町）であった。支援団体が南隣の Issaquena 郡の1人の黒人自作農を説得し、彼の所有地内にサーカス用の大テントを1張張る許可をえた。こうしてこの新たな地に、Strike City から約180人が移ってきた。ただし窪地のため降りつづく冷雨にたたら

れて、避難民は泥まみれとなり、半数は病気にかかったといわれる。この地が Mud City と呼ばれたのはそのためである。

しかしこの地での生活も長くは続かなかった。土地を提供した自作農に対して、Klan 組織から殺害予告の脅迫が寄せられたため、再び彼らはちのちの<sup>30)</sup>をえなくなったからである。

こうして約125人の黒人が Mud City のテントを畳んで、第3の土地——州都 Jackson 西方の Mount Beulah に移ることになる。結局 Delta Ministrey が、この地に自から所有していた訓練センターを応急的に開放したのである。その上で彼らを真に定住させる土地を求めて必死の活動が始まった。

#### ④ Freedom City の建設

白人支配層の威圧の下で、土地の売り主を探す作業は難航をきわめた。しかしついに Dalta Ministrey は、Jackson に移住しようとする1プランターから Greenville の南東郊外の土地400エイカを買取することに成功した(その土地価格16万ドルのうち7万ドルは寄付金、残る9万ドルは借金でまかなった)<sup>31)</sup>。そして66年7月、94人がこの地に移住し、Freedom City となづけた定住地の建設が始まったのである。<sup>32)</sup>

教会・フォード財団や連邦機関 Office of Economic Opportunity (OEO) などからさまざまな資金援助をうけて、まずこの地に定住用の住宅が建てられていった。こうしてこの地は周辺プランテーションから新たに追いたてられた黒人たちの避難先として大いに役だった。事実 Freedom City の住民数は、69年夏には75家族500人以上に達したという<sup>33)</sup>(67年7月には先の Andrews Plantation にスト破りとして導入された白人2家族が救済を求めてころがりこむ出来事もあった)<sup>34)</sup>。

彼らの生計を支えるためにさまざまな事業が試みられた。たとえば協同農場方式で大豆 soybean を作付したり、この地に食品加工工場などを誘致する計画がそれである。<sup>35)</sup>しかし数年をへずしてこれらの事業は失敗に終る。数十家族も<sup>36)</sup>の住民を農民として自立させるには、400エイカの土地は余りに狭すぎたし、69年のニクソン政権成立以降の連邦資金の途絶が、苦境に追いつちをかけたからである。<sup>37)</sup>したがってその後の Freedom City は、転職のために職業訓練をう

けたり、近在の賃仕事にでかけていくための共同生活の場となっていく。

### ⑤ Freedom Village の現在

Freedom City は Freedom Village と改名され、今もこの地に16家族が残っている(他に空屋が2戸。ただし83年8月現在)。独立した各家屋に1エイカの自留地が付いている他は、土地はすべて協同組合が所有している。

当初購入した400エイカの土地のうち、今なお80エイカの住宅地域の他に、農用地として235エイカを所有している(ただし農業機械を買う資力を欠くためこの農用地部分は、全て白人農民に貸出し、農業経営を放棄している<sup>38)</sup>)。したがって残りの85エイカは、財政危機の穴埋めにぎりぎり売りしてきたわけである。

住民は周辺都市に働きにでかけたり、福祉手当の受給で暮らしをたて、相当な窮乏生活を強いられている<sup>39)</sup>。たしかに評価の基準を生活レベルの点にだけ限定するならば、Freedom City の歩みは「無知で unskillfull な plantation negro による事業経営失敗の歴史<sup>40)</sup>」として総括することもできよう。

しかし他面では、デルタの黒人民衆が、自信と誇りをとり戻し、白人支配層から精神的文化的に自立する上で、この闘いが担った意義と役割は、決して小さくはなかった。黒人民衆の人間的誇りと団結を示すデルタ最大の文化行事として、デルタの黒人シェアロッパーの生みだした誇るべき音楽=ブルースの祭典——Delta Blues Festival がある。この祭典が、デルタの黒人社会最大の自主的経済組織MACE (Mississippi Action for Community Education) の主催で78年以来毎年9月、他ならぬ Freedom Village を舞台に数万人を集めておこなわれているのも偶然ではないのである<sup>41)</sup>。

1) Fannie L. Hamer も同じ考えであった。Tracy Sugarman, *Stranger at the Gates: A Summer in Mississippi*, 1966, pp.200-201参照。

2) その他たとえば Panola 郡 Batesville 近郊の Hays Brothers and Hall Plantation で働く50人のシェアロッパー・小作農が提出した要求書には、次のような項目も含まれていた。すなわちプランターは、かつての騾馬のかわりにトラクターを無償で提供すること、利率を10%から6%に下げることなど。詳細は、SNCC, *Movement*, July 1965 に掲載された Militancy in the Delta と題する記事を参照。

3) その全体像についてはさしあたり、Joanne Grant 編の資料集 *Black Protest:*



*History, Documents, and Analyses*, 2nd ed., 1974, pp.498-500 所載の MFLU 報告書を参照。

- 4) 「Shaw では黒人の働く姿はみられない」「ワシントン郡だけで500人がストに入った」などストの情景については Tracy Sugarman, *op. cit.*, pp.198-200. その他詳細は Clayborne Carson, *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s*, 1981, p.172 および SNCC, *Movement* の前掲記事を参照。
- 5) 50年代末から公民権運動が激しく闘われたあの南東端の Fayette 郡を中心に若手活動家の手で7月22日 Tennessee Freedom Labor Union が結成され、黒人組織内の亀裂をうみだしていた。詳細は SNCC, *Movement*, Aug. 1965 付記事を参照のこと。
- 6) その詳細は、SNCC, *Movement*, Oct. 1965 付の For 200 Years We've Been Working for Nothing と題する記事、とくにスト・リーダーの George Shelton の言明を参照。
- 7) *Movement*, July 1965 付の前掲記事をみよ。
- 8) たとえば, *Ibid.*, や Tracy Sugarman, *op. cit.*, p.219 を参照。
- 9) *Movement*, July 1965 付記事。そこではストに参加した数少ない hauler の事例も報告されている。
- 10) Bruce Hilton, *Delta Ministry*, 1969, p.17.
- 11) 以上の詳細については, *Ibid.*, pp.67-72 を参照。なおストリーダーの1人の証言によるとスト突入を約束した者は200人にのぼっていたという (John H. Sylvester からのききとり。1983年8月9・13日 Strike City)。
- 12) The Strike that Failed: Mississippi Tent City, *Look*, March 8 1966, pp. 26-29 をみよ。なお Tracy Sugarman, *op. cit.*, p.198 によると約100人がおいたてられたともいう。
- 13) Foster の証言によると彼の家系は祖父以来自作農であった。しかし父親の代に土地を買ったそうとして白人社会ににらまれ、ついに57年父は白人暴漢に射殺されたが、自殺として処理されたという (Bruce Hilton, *op. cit.*, p.71)。彼の生いたちの詳細については Leon Howell, *Freedom City: The Substance of Things Hoped For*, 1969, pp.81-92 のインタビュー記事も参照。
- 14) 以上については, Bruce Hilton, *op. cit.*, pp.72-75.
- 15) *Ibid.*, pp.75-76 および *Look*, March 8 1966 付前掲記事 pp.26-29 もみよ。
- 16) 昔の習慣が忘れられないのか83年8月13日の訪問当日も, John H. Sylvester は小型トラクターを賃借してこの6エイカの土地を耕作していた。
- 17) John H. Sylvester 夫妻・Gather Lee Martin 夫妻からのききとり (83年9・13日, Strike City)。

- 18) Michael J. Piore, *Memorandum on the Economic Problems of Negroes in the Delta of Mississippi*, mimeographed memorandum to the NAACP Legal Defense and Education Fund, n. d., *quoted in* Lester M. Salamon, *Protest, Politics and Modernization in the American South: Mississippi as a "Developing Society"*, Ph. D. dissertation to the Harvard Univ., 1971, p. 392.
- 19) 66年1月8日付の Freedom Information Service のレポート, *quoted in* Bruce Hilton, *op. cit.*, pp. 82-83.
- 20) *Ibid.*, p. 77; Leon Howell, *op. cit.*, p. 26.
- 21) Bruce Hilton, *op. cit.*, 78.
- 22) Hodding Carter III, The Negro Exodus from the Delta Continues, *New York Times Magazine*, March 10, 1968, p. 26.
- 23) Bruce Hilton, *op. cit.*, p. 78・238 を参照。
- 24) Leon Howell, *op. cit.*, p. 26, Bruce Hilton, *op. cit.*, p. 79.
- 25) さしあたり *Ibid.*, pp. 26-27 を参照。
- 26) Hodding Carter III, *op. cit.*, p. 26.
- 27) その詳細は, Leon Howell, pp. 26-30 および Bruce Hilton, *op. cit.*, pp. 77-88.
- 28) 排除された直後の DM 事務所での記者会見の様様については, Joanne Grant (ed.) *op. cit.*, pp. 501-505.
- 29) Bruce Hilton, *op. cit.*, pp. 105-107; Leon Howell, *op. cit.*, pp. 37-38.
- 30) Leon Howell, *op. cit.*, p. 39, Bruce Hilton, *op. cit.*, pp. 107-108.
- 31) Ray Marshall・Lamond Godwin, *Cooperatives and Rural Poverty in the South*, 1971, p. 37・59. Bruce Hilton, *op. cit.*, p. 112 を参照。
- 32) Leon Howell, *op. cit.*, p. 43・pp. 49-51 また秋元英一「1930年代アメリカ南部における協同農場運動の軌跡」『歴史学研究』1982年5月, p. 16 でも関説されている。
- 33) Leon Howell, *op. cit.*, p. 56.
- 34) *Ibid.*, pp. 71-73, Bruce Hilton, *op. cit.*, pp. 137-138.
- 35) *Ibid.*, pp. 124-125.
- 36) 土地を売ったプランター自身が, 農場で食べていくには1家族につき250 エイカは必要だと忠告していたという (Mrs. Thelma Barnes, ex-secretary of Delta Ministrey, chairperson of Delta Resource Committee からのききとり, 83年8月8・9日 Greenville)。
- 37) 詳細は Nancy Weaver・Paul Beaver, Mississippi Delta: Empty Hands in a Fertile Land, *The Clarion Ledger*, Dec. 17, 1980, p. 8 所載の 'Promised Land', Now a Failed Dream: US saw Freedom Village as Problem, not

Opportunity と題するルポ記事を参照。

- 38) 最初の入植者で記録係書記を勤めていた Mrs. Ora D. Wilson からのききとり (1982年9月1日, 83年8月8・9日, Freedom Village)。Wilson 夫人の伝記については Leon Howell, *op. cit.*, pp. 67-70 をみよ。なお76—78年に80エイカの居住地区を耕して再び Soybean の作付を試みたが、結局資金不足のため収益があがらなかったという (Nancy Weaver・Paul Beaver, *op. cit.*, p. 8)。
- 39) 以上は Mr. Jannie Atking (President of Board of the Freedom Village) や Clay Miller 夫妻 (original settler) はじめ多くの居住者からの見聞による (83年8月9日, Freedom Village)。
- 40) デルタの黒人社会の最高リーダーの1人 Mr. Charles Barnerman, Director of Mississippi Action for Community Education (MACE) による評価 (82年9月1日, Greenville でのききとり)。
- 41) Mr. Malcom Walls, Delta Blues Attorney (MACE) からのききとり (82年9月1日・83年8月10日, Greenville)。

#### IV 黒人の自主的組織の前進

——ホームズ郡のばあい——

##### (1) 公民権運動の前進

デルタの東端に位置するホームズ Holmes 郡でも、先の2郡と同様公民権運動の前進は、決して容易なことではなかった。事実いち早く55年にこの郡でも Citizens' Council が結成され、公民権運動の萌芽をつみとただけでなく、翌年にはあの南部小作農組合 S T F Uが1930年代末以来推進してきた進歩的な協同農場運動の最後の残滓であった郡中央部の Providence Cooperative Farm を「人種統合」的行為の科で脅迫し解体に追いこむという「戦果」まであげて<sup>1)</sup>いた。したがって少なくとも60年代初頭までは、郡内に散在する125の黒人集落は、相互に政治的に分断され、要求を交流し団結しあえる組織を全くもちえない状態がつづいていた。

ところでこの郡には、ニューディール当局が創設したデルタ地域最大の黒人自作農のコミュニティ Mileston があることはすでに述べた。この郡の公民

権運動の突破口は、まず彼ら約100家族の自作農集団によってきりひられることになる。

すなわち63年初、Greenwoodで活動中のS N C C活動家を招いてMilestoneの自作農有志の秘密集會がひらかれた。そして5月9日、70エイカの自作農Hartman Turnbow（彼は、46—48年シカゴに住み、フォードの自動車工場で働き、労働運動の経験をもっていた<sup>2)</sup>）をリーダーに、12人がLexingtonの郡役場courthouseにおもむき、ついに有権者登録に成功したのである<sup>3)</sup>。

しかしその報復は執拗を極めた。早速その夜、Turnbowの家は銃撃をうけ、応戦したTurnbowは翌朝S N C Cの活動家Bob Mosesら4人とともに逆に逮捕された。そしてその後も4度襲撃され、コミュニティ・センターは放火された<sup>4)</sup>、等々。

しかし結局、マイルストンの地域的団結の力は、この反攻をはねかえす。そしてマイルストンはコミュニティぐるみ、フリーダムサマーの一大拠点となったのである<sup>5)</sup>。こうしてホームズ郡の黒人有権者登録率は、67年には73%まで飛躍をとげ、同年には自作農の家系出身の学校教師Robert G. Clarkを1890年以来最初の黒人州議會議員としてこの郡から選出するなど<sup>6)</sup>、公民権運動は大きな前進をとげて現在に至っている（先の第4表も参照）。

## （2） 前進を支えた基盤——サンフラワー郡との比較

対照的な運動展開をたどったサンフラワー郡のばあいと比較しつつ、この郡の運動前進の秘密を探ってみよう。

〔1〕 最初に、この郡の擁する黒人自作農集団の層の厚さと彼らの地域的結合の強さ（とくにマイルストンを核とする団結）が、運動前進に決定的な役割を果たしたことを指摘しなくてはならない。

一般に黒人小生産者、とくに自作農層が公民権運動の最も勇敢で積極的な担い手に成長する傾向は、南部農村部の全域で共通してみいだされた。たとえば先述のLester Salamonの全南部的調査によると、F S Aの創設した自作農は、どこでも小作農層よりはるかに積極的に公民権運動に参加しただけでなく、より

危険で決定的な任務や部署をひき  
うける傾向があった<sup>7)</sup>(第9表参照)。

この郡で自作農について運動を  
積極的に担うことになったのは、  
自営業者・持ち家居住者・郡外に  
通勤する賃労働者など総じてプラ  
ンター支配から相対的に自立しう  
る階層であった<sup>8)</sup>。

他方ここでも、白人支配層に生  
殺与奪の権を握られた黒人たち  
——とくにプランテーション内に  
住む労働者や白人権力によって  
「恩恵的」に雇われた教師や牧師  
層の運動参加は困難をきわめた<sup>9)</sup>  
(学校教師が文盲テストに最も尻ごみ

するという歴史の皮肉!)。かつて大塚久雄氏が情感をこめて描きだしたように、  
民衆が統治能力を奪いかえし民主主義の担い手に成長するうえで、独立自尊の  
小生産者層を大量に創出する戦略的重要性——いわば「小生産者型人間発達」  
の特別な意義は、ここでも明らかである<sup>10)</sup>。

[2] 次にこの郡では彼らを母体にして「高度に複雑な自主的組織」の網の  
目をつくりだすいわば草の根の「組織革命」が進行し、郡の政治構造を大きく  
塗りかえることになった。これがサンフラワー郡とは異なる第2の特徴である。

まず黒人側の統一的政治組織としていち早くMFDPの郡組織が結成され  
た(64年)。このMFDP組織を草の根で支えたのが、郡内17地区ごとに毎週  
1回定期的に開かれる地区集会である。その上で毎月1回——第2日曜日に17  
地区の代表者を集めた執行委員会 executive-board meeting が、Lexington  
で開催される。さらに毎月第3日曜日には、63年以来連綿とつづく全郡集会  
county-wide meeting が召集され、最終的な意志統一の場となる<sup>11)</sup>。

第9表 F S A自作農と小作農の  
公民権運動の参加率<sup>1)</sup>

	F S A 自作農	同一郡内 の小作農
有効調査数	177	91
1965年投票権法成立 前の有権者登録率	59.4 <sup>2)</sup>	18.5
公民権組織に加入	49.2	19.8
地域の白人に抗議す る請願に署名	25.4	2.2
公職に立候補	19.2	7.7
外部の公民権活動家 を住ませた	12.4	1.1

1) Gee's Bend (Ala.), Lakeview (Ark.), Mileston (Miss.), Mounds (La.), Prairie (Ala.), Tennessee Farm Tenant Security (Tenn.), Tillery (NC), Townes (Ark.) の黒人用8プロジェクトの参加者178人と同一郡内に住む黒人小作農100人を対象に面接調査したもの。

2) 有効調査数は160。

(出所) Lester M. Salamon, *The Future of Black Land in the South*, in Leo McGee・Robert Boone, *The Black Rural Landowner-Endangered Species*, 1979, pp.180-181 より作成。

このように黒人住民は60年代以降今日まで、三層のレベルで自からの統治機構——いわば「影の政府」を組織しつづけてきたのである。M F D Pが白人支配層と連邦議会の代表権を争った65年1月には、この郡からワシントンに100人の請願団を送りだし<sup>12)</sup>、67年には最初の黒人州議会議員を当選させ、M F D Pの解体後も今日までその旗をかかげ続けてこられた組織的基盤がここにある。

〔3〕 黒人の経済的自立という側面でも、組織革命は大きく前進した。「仕事おこし」と「地域づくり」の課題を担って、協同組合の網の目が郡内に張りめぐらされたのである。

特に組合員数が発足直後（1944年）の120人から32人にまで衰退していたマイルストーン農業協同組合 Mileston Farmers Cooperative の再建運動が、ここでも中軸的役割を果たした。こうして繰綿組合 Mileston Co-operative Gin を再興したり、約100人を結集して畜産事業 Beef Cattle Project や野菜の共同販売事業を新たにおこすなかで、60年代末には組合員数200人を超えるまでにマイルストーン農業協同組合は復活・発展するに至る。この再建運動の中心人物が、丘陵地帯の220エイカの自作農の出身で当時のマイルストーン地区M F D P議長、Howard Taft Bailey であった（彼は現在郡政の最高責任者 chairman of Board of Supervisors として活躍中）<sup>13)</sup>。

〔4〕 加うるにこの郡では白人支配層との争奪戦のすえ、連邦資金——とくにジョンソン政権下で急増する Head Start 計画（貧困家庭の4—5歳児を対象にした就学前保育事業）や職業訓練事業などの貧困対策予算を黒人側が支配し、自からの団結と発達のために活用する方向がきりひらかれた。実際貧困対策費の総額は70年時点で100万ドル以上に達し、600—800人を雇う郡最大の「産業」に成長していた。したがって連邦資金を黒人の自主的組織が掌握しえたことは、「仕事おこし地域づくり」運動を前進させる上で極めて有利な条件となった<sup>14)</sup>。

これにたいしてサンフラワー郡では事態は対照的な展開をとげる。すなわち66年から数年間、この新たな連邦資金をどちらが支配するかをめぐる白人権力側のおしきせ組織と F. L. Hamer らの自主的黒人組織とが激しい争奪戦を演じる<sup>15)</sup>。しかし結局71年になって自主的組織側は敗退—消滅してしまい、こ

の巨額の連邦資金（66—76年の間に総計1,500万ドル）は白人支配層の下賜する「恩恵」として、黒人民衆を分断する武器として運用されることになった。<sup>16)</sup><sup>17)</sup>

〔5〕 プランテーション労働者をまきこむ力量の点でも、ホームズ郡の運動はより高い到達点を築くことになった。当時の活動家の証言によると、60年代中葉に農業労働者への最賃制適用とバックペイ支払を求める法廷闘争をおこし、この郡をデルタでも最高の賃金地帯に変える成果をあげた。そしてこれを力にプランテーション労働者の有権者登録運動を飛躍させたという。<sup>18)</sup>

また追いたてられたプランテーション労働者を救済する事業も活発に展開された。その典型例が、Tchula 南東部の丘陵地帯の一角をきり拓いて建設した1,230エイカのHoward Community Project (1966— ) だといってよい。追いたてられた35家族に50—55エイカの土地を与え、マイルストン農業協同組合の一部にくみこむことによって彼らの農業経営を支えようとしたのである。<sup>19)</sup> 要するにこの郡の公民権運動は、追放＝清掃されたプランテーション労働者に住宅を提供するにとどまらず、ごく一部にせよ彼らを農民として自立させる力量（FSA事業の30年後のミニ版！）まで蓄積しえたのであった。<sup>20)</sup><sup>21)</sup>

〔6〕 サンフラワー郡と比べて、この郡では黒人社会内に進行する避けがたい階級分裂を抑制し調整する力量が、より発達しているという特徴もあった。自作農集団が、黒人中産階級とプランテーション労働者とを結びつけ、単一の政党MFDPに統合するための絶好の紐帯となったのである。

〔7〕 最後に、これらの統治力量を担う活動家集団の規模という点でも、両郡の間には大きな差があったことを指摘しておかなければならない。すなわちホームズ郡に張りめぐらされた黒人組織には70年時点ではほ 800 の役職があり、約 600 人の活動家集団がこれらの任務を担っていた。<sup>22)</sup> これにたいしてサンフラワー郡のばあい、1.6 倍もの黒人人口を擁しながら活動家数は 200 人程度にとどまっていたといわれる。<sup>23)</sup>

### （3）最近の変化

#### ① 活動家層の変動

今日でもMFDPの党費を払う活動家数は約500人に達する。<sup>24)</sup>しかし党員のなかでマイルストーンを中心とする自作農層の位置と比重は、次第に後退しているという。なぜならマイルストーンでも土地貸出や脱農化がすすみ、農業に従事するのは45—50家族にすぎなくなった。加うるに若者の多くは都市に去っていき、<sup>25)</sup>地域社会の活力を奪っているからである。これにたいしてBAWI型工場を誘致した郡東部の商工業都市 Durant が、<sup>26)</sup>黒人運動の拠点としての比重を高めているという（因みに Durant は、18年間 MFDP の全郡集会の議長をつづける建築業者の Walter Bruce の地盤）。

## ② 「チューラ7」——プランター層の反攻事件

最近のデルタの政治的力関係を知る上で、この事件は興味深い素材を提供している。<sup>27)</sup>以下その大筋だけを紹介しておこう。

郡西部のプランテーション地帯——とくに人口3,000人（うち黒人2,800人）のチューラ Tchula 市は、伝統的にMFDPの影響力の最も弱い地域の一つであった。しかし77年になってようやく、当時27歳の Eddie J. Carthan 青年が初の黒人市長に当選し、以後住民本位の市政が格段に前進する。

これにたいしてプランターや商人など白人支配層は、まず1万ドルの賄賂で市長を買収しようと策したが失敗、攻勢に転じた。すなわち80年春、市長側が任命した警察署長 police chief に対抗して、白人主導の市議会議員 alderman 側が別人の任命を強行し、双方が武装する二重権力状態となった。そして結局、白人側警察権力によって Carthan 市長と1人の黒人議員 alderman、5人の黒人側警察官の計7人が、<sup>28)</sup>武装解除・逮捕され裁判にかけられる事態となった（「チューラ7事件」）。

こうして黒人市政は転覆されるが、他方前市長を殺人罪で起訴したこの裁判にたいする疑問と怒りも、ホームズ郡から全米へと急速にひろがっていった。たとえばホームズ郡の黒人は Carthan 支援のために23万ドルの資金を集めたし、82年10月には州都 Jackson で3,000人近くを集めて「差別裁判抗議集会」<sup>29)</sup>が開かれた、等々。

このような支援運動のもり上りを背景に、83年10月13日「チューラ7」のう



ち最後まで収監されていた Carthan が「殺人罪」の指定をはねのけて、ついに保釈をかちとった。こんごは完全無罪の闘いが展開されるという<sup>30)</sup>。恐らくホームズ郡に蓄積された公民権運動の伝統は、この事件の逆流をのりこえる力量を発揮するであろう。

- 1) Lester M. Salamon, *op. cit.*, p.447. なお Providence Cooperative Farm の歴史については秋元英一, 前掲論文, 11-12ページに詳しい。
- 2) Hartman Turnbow 夫妻からのききとり (83年8月18日, Mileston)
- 3) Howell Raines, *My Soul is Rested: Movement Days in the Deep South Remembered*, 1977, pp.260-266, Clayborne Carson, *op. cit.*, p.89, Lester Salamon, *op. cit.*, p.454 などを参照。
- 4) Pat Watters *et al*, *Climbing Jacob's Ladder: The Arrival of Negroes in Southern Politics*, 1967, pp.135-136.
- 5) この点, たとえば Elizabeth Sutherland (ed.), *Letters from Mississippi*, 1965, 木内信敬訳『閉ざされた社会』1969年, 38・66ページを参照。
- 6) R. Clark の経歴については, George A. Sewell, *Mississippi Black History Makers*, 1977, pp.235-236 をみよ。
- 7) Lester Salamon の好論文 The Future of Black Land in the South, in Leo McGee・Robert Boone, *The Black Rural Landowner—Endangered Species*, 1979, pp.178-182 を参照。事実アラバマの Wilcox 郡でも選挙登録運動の突破口は63年に有名な Gee's Bend の FSA 自作農たちによってきり開かれた (Pat Watters *et al*, *op. cit.*, pp.160-162)。Pettway 家の奴隷の後裔たる Gee's Bend の住民たちの興味深い成長の歴史は Donald Holley, The Negro in the New Deal Resettlement Program, *Agricultural History*, July, 1971, pp.184-187 (*New South*, 1972 winter, pp.58-60 にも再出) に詳しい。他方1919年秋の有名な Elaine の虐殺事件 (公正な決済の要求と組織化をめざす黒人クロッパーの運動に対して約100人の殺害・1200人以上の逮捕収監でこたえた大弾圧事件) の現場にほど近いアーカンソー州 Lakeview の FSA 自作農村落のばあいも, 1940年代から全員が投票権を行使しており, 公民権運動の拠点となっていたという (Mr. Sailas Dolphin, Mayor of Lakeview からのききとり。83年8月6日, Lakeview)
- 8) Lester Salaman, *Protest, Politics and Modernization……*, p.554.
- 9) *Ibid.*, p.455
- 10) この点の詳細は拙稿「民衆発達の経済史を求めて」『経済科学通信』39号, 83年6月, 30-31ページを参照。
- 11) Lester Salamon, *op. cit.*, pp.468-470. もっとも全郡集会の参加者数はかつ

- ての200人以上から漸減し、最近では60—100人程度だという(Mr. Walter Bruce, chairman of Holmes Co. MFDP からのききとり。83年8月19日, West)。
- 12) Lester Salamon, *op. cit.*, p. 472, また Howard Zinn, *SNCC-New Abolitionists*, 1965, ハワード・ジン 武藤一羊訳『反権力の世代』1967年, 265—269 ページ; Benjamin Muse, *The American Negro Revolution: From Nonviolence to Black Power*, 1963—1967, 1968, 志賀潔他訳『アメリカの黒人革命』昭和45年, 165ページも参照。
- 13) Mr. Howard Taft Bailey, chairman of Board of Supervisers, Holmes Co. からのききとり(83年8月19日, Lexington) また Lester Salamon, *op. cit.*, pp. 538—543 および Ray Marshall・Lamond Godwin, *op. cit.*, pp. 55—57 も参照。
- 14) Lester Salamon, *op. cit.*, pp. 500—503.
- 15) Marie M. Hemphill, *Fevers, Floods and Faith: A History of Sunflower County, Mississippi*, 1980, pp. 760—761.
- 16) *Ibid.*, p. 760.
- 17) Lester Salamon, *op. cit.*, p. 506.
- 18) この運動を指導した公民権運動の活動家 Ms. Mary Hightower からのききとり(83年8月19日, Lexington)。
- 19) Howard 地域に古くから住み 123 エイカの所有地の他に 150 エイカを借地する Mr. Leroy Johnson からのききとり(83年8月20日, Howard)。ここでも大半が脱農し 4 農場に借地が集中する傾向がある。
- 20) たとえば Robert Clark が中心となって55戸の住宅を建設し、追いたてられた黒人家族を収容したという(Ms. Mary Hightower からの前掲ききとり)。
- 21) Southwest Alabama Farmers Cooperative Association (SWAFCA) が活発に活動するアラバマ黒土地帯でも同様なケースがある。たとえば Sumter 郡では公民権運動にたち上ったため追いたてられた小作農 65 家族を収容するため、Panola Land Buyers Association が結成されボストンの富豪の援助をえて1200 エイカの土地を入手した。また Dallas 郡でも 67 年秋追いたてられた家族を救済するため 4.5 万ドルで 301 エイカの土地を入手した、等々 (Ray Marshall・Lamond Godwin, *op. cit.*, p. 50・60)。
- 22) Lester Salamon, *op. cit.*, p. 440.
- 23) *Ibid.*, p. 443.
- 24) Mr. Walter Bruce からの前掲ききとり。
- 25) Mr. Robert Lee Howard, secretary of Mileston Farmers Cooperative その他関係者からのききとり(83年8月18日, Mileston)。

- 26) Mr. Walter Bruce からの前掲ききとり。
- 27) この事件については Holmes Co. Union for Progress の専従活動家 Mr. Isaiah Winters から貴重な情報を得た。記して感謝する。
- 28) 以上についてはさしあたり西海岸を対象としたアメリカ共産党系新聞 *People's World*, Aug. 28, 1982 および池上日出夫「うけつがれる先駆性と伝統」『科学と思想』48号, 83年4月, 671ページ参照。
- 29) *Southern Exposure*, Jan. Feb., 1983, p.10 付記事によった。
- 30) この点については *Southern Exposure*, Nov.・Dec., 1983, p.3 をみよ。

## V 小 括

(1) 1930年代以降の古い土地関係の地主的破壊＝地主的土地清掃の強行は、それまで「棉と商工業の同盟」の枠内でゆるやかに進行していた「上からの革命」を一挙に加速し、その結果ミシSSIPデルタ地帯では三分制が形成され始めた。一定の限界を自覚しつつあえて国際的比較を試みるとすれば、プランテーション制度の先進地帯の農業構造は、かつてのプロシアのユンカー制に近い型から近代イギリスで支配的であった型の方へと変貌していったといえなくもない。深南部の経済構造のまさに基底を貫くこのような資本主義的進化の傾向こそ、戦後世界における人権保障運動の画期的前進とあいまって、公民権運動の展開を準備した最も奥深い背景・基盤であった。

(2) 黒人奴隷制の直接の遺制たるプランテーション制度の最も発展したミシSSIPデルタこそ、人種差別制度の最強にして最後の堡壘であった。ここでは公民権運動を抑圧するために、むきだしのテロルから黒人自体の追放＝土地清掃に至る全ゆる手段が動員されたが、結局60年代の世界史的力関係の下では黒人住民をデルタの地から一掃しつくすことはできなかった。こうして黒人民衆の大半は、しぶとく居座り、この地で公民権を獲得するに至った。

(3) デルタではプランター支配から自立しうる自由な小生産者層——とくに黒人自作農層が極端に少く、しかも60年代には土地革命＝農民的自立のための経済的条件が大巾に失われていたことが、民衆側の統治能力の発達を妨げ、公

民権運動の展開を特に困難なものにした。しかしここでも、歴史の創造主体めざす黒人民衆の成長の歩みは、その足をとめなかった。事実デルタでも少数であれば、小生産者型人間発達の主体たる黒人自作農集団は、都市部に蓄積されたより全国的で組織的な民衆運動の担い手たちに導かれることによって、公民権運動の前進に重要な役割を果たした。とりわけ民衆運動への譲歩策として30年代以降F S Aが創設した黒人自作農集団の果たした積極的役割は特筆に値いする。かつて南部の支配層は、黒人内から「アングルトム」（白人好みの従順な黒人）の選別育成＝旧秩序安定の道具としてF S A事業を利用しようとした。しかしその30年後、「アングルトム」の息子や娘たちは、支配層の思わくをのりこえて旧秩序に対する最も仮借ない抵抗主体へと成長していったのである。<sup>1)</sup>しかも今日では「自由な生活時間」と発達保障型公務労働に支えられて資本主義的大工業の基盤からも、「小生産者型人間発達」の狭い限界をのりこえた新しい型の民主主義の担い手たちが大量に育ちつつある。<sup>2)</sup>

(4) 周知のようにミシシッピデルタの闘争を含む60年代の黒人解放運動の高揚は、ベトナム人民を先頭にした世界的な民族解放運動の前進と連携・合流する勢いを示した。この国際的連帯の力こそ、国内における黒人反乱と国外における被抑圧民族の反乱の同時制圧というアメリカ支配層の当初の方針を財政的にも道義的にも破たんさせ、アメリカ軍をベトナムから撤退させた最大の原動力であった。<sup>3)</sup>この教訓に学んだアメリカ支配層は、莫大な財力を投入して黒人運動を合衆国内外の他の民衆運動から分断するとともに、<sup>4)</sup>黒人諸階層を相互に対立させるより巧妙な政策体系をうちだすに至った。

こうしてデルタの白人支配層も変化した世界史的力関係を事実として受け入れた上で、黒人民衆を生存競争に組織し、その一部を買収し、可能ならば他の一部を分断・弾圧する（たとえば「チューラ7」事件！）よりブルジョア的に洗練された支配様式を採用するようになった。公民権運動の前進は、Citizens' Council 系の頑迷な保守支配層さえ再教育したのである（その典型的な成功例はサンフラワー郡であろう）。

(5) この分断によるおさえこみの実績を背景に、よりむきだしの生存競争と

軍事的抑圧とてより安上りに支配体制を再構築しようとするレーガン政権が登場した。この今日の情勢の下で黒人民衆の運動はいかなる課題に直面しているのだろうか。筆者にはこの点を正面から論じる能力がないが、本稿でとりあげた地域に関しては少なくとも次のことはいいうと考える。すなわちホームズ郡のばあい、黒人運動のおちいりやすい陥穽——白人への逆差別と排外主義を<sup>5)</sup>警戒し、白人労働者との連帯を追求する積極的イニシアチブが切に望まれる。他方サンフラワー郡のばあい、なによりもまず黒人社会内の分断状況の民主的克服作業が必要であろう。そのためにも雇用創出と地域社会の再建とを結びつけた「仕事おこし地域づくり」運動の積極的展開が求められよう。

いずれにしても今春の民主党の大統領候補予備選挙において「虹の連合」をかかげるジェシー・ジャクソン候補がミシシッピ州で30%を超える票を獲得し<sup>6)</sup>えた背景には、このような黒人民衆の不屈の闘いの歴史があったのである。

- 1) この視角の重要性は、あの Black Panther 党発祥の地アラバマ黒土地帯 Loundes 郡の詳細な調査をされている上杉忍氏から多くを教えられた。
- 2) この点の理論的基礎は拙稿、前掲論文、31—35ページおよび基礎経済科学研究所編『人間発達の経済学』82年参照。
- 3) たとえば Ronald Segal, *The Race War*, 1966, 山口一信他訳『人種戦争』(上) 256—261ページおよび James O'Connor, *Fiscal Crisis of the States*, 1973, 池上惇他監訳『現代国家の財政危機』81年, 33—37, 179—199ページを参照。
- 4) カリブ海の人口11万の黒人の島グレナダで79年に革命政権を樹立したのは、アメリカ留学中公民権運動の洗礼をうけたかつての「同志たち」であった。この意味からも連邦議会の24人の黒人議員団が昨秋のグレナダ侵略にたいして非難の立場をとったのも当然である。黒人運動を分断することは今日の世界的力関係の下では容易な課題でないことをこの事実は示している。
- 5) この点で John Rozier, *Black Boss: Political Revolution in a Georgia County*, 1982は白人保守派の立場から、南部で最も早く(68年)黒人側が郡政を支配した Hancock 郡の問題点を分析しており参考になる。黒人リーダーの官僚化の危険、白人への「逆差別」、資本逃避による経済荒廃など、今日の黒人運動の当面する課題を知る上で批判的吟味に値いする文献であろう。
- 6) たとえば近着の *Southern Exposure*, Feb. 1984 の Elections: Grassroots Strategies for Change と題する特集は、このような運動の諸断面を活写しており参考となる。